

# 図書館情報学橘会会報 第1号

2005年2月発行

発行者 社団法人茗溪会支部図書館情報学橘会

〒305-8550 つくば市春日1-2

E-mail tachibana-kai@slis.tsukuba.ac.jp

## 茗溪会支部図書館情報学橘会 第1回総会開催

### 新しい年を迎えて

図書館情報学橘会会長 高鷲 忠美

茗溪会支部となって初めての新年を迎えました。高度情報通信社会の社会への浸透は、図書館の存在そのものを見直さねばならない時期にきているのではないかと考えさせられます。また、公共図書館では、指定管理者制度の導入、PFIの導入、完全委託化の動きなど、まさに激動の時を迎えています。大学図書館も電子ジャーナルに象徴されるような、印刷メディアと電子メディアの共存、あるいは電子メディアの存在なくしては、もう研究支援活動も十分にできない状況にあります。

このようなときに、同窓会橘会が、会員の皆さんにどのような活動を提供しお役に立てるのか、また現役の学生にどのようなサービスを提供するのかを、今年度はしっかりと検討したいと役員一同思っています。活動のための財源をどうするかが大変大きな問題で、今見かけ上あるお金は、会員の皆さんが5年間分、図書館情報大学同窓会橘会の会費として納められたものがほとんどです。従って、これから数年間は、この中から茗溪会の会費を納め、不足分を皆様から納入していただくこととなります。橘会の活動資金は、茗溪会会費として皆さんから納入される3,500円の10%が還元されますので、これを充てることとなります。大変厳しい状況ですが、

皆様のさらなるご支援をいただき、同窓会としての活動をできる範囲内で行っていきたく考えていますので、皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

最後に、これまで同窓会の運営に長年献身的に尽力なさってきた、副会長岩淵泰郎氏が昨年急逝されたという悲しいお知らせを皆様にお伝えしなければなりません。岩淵氏は、橘会の活動を長く支え、図書館情報大学同窓会との統合、茗溪会との統合でも、目立たないところでひじょうな尽力をなさり、その実現に多大な貢献をなさってきました。これから、同窓会橘会の運営にこれまで以上の岩淵氏のお力とを考えていた私たちにとっては非常な痛手です。残された役員一同、力を合わせて活動して参りますので、会員皆様のご支援をなにとぞよろしくお願いいたします。

### 新 Web ページ開設のお知らせ

2005年3月末の公開を目標に、『図書館情報学橘会』の新 Web ページを作成中です。橘会の活動状況をお知らせするとともに、卒業生の方々の交流の場にご活用ください。

URL は以下の通りです。

<http://www.slis.tsukuba.ac.jp/tachibana-kai/>

## 統合から法人化へ

筑波大学図書館情報メディア研究科長  
磯谷 順一

図書館情報大学は平成 14 年 10 月 1 日に筑波大学と統合し筑波大学となり、平成 15 年 4 月の入学者は筑波大学図書館情報専門学群または筑波大学図書館情報メディア研究科に迎えた。統合に際して、国立学校設置法の一部を改正する法律により、平成 14 年 9 月 30 日に在学していた学生が卒業または修了するまでの間は図書館情報大学が存続するものとされた。平成 15 年度 4 月の 3 年次編入生も図書館情報大学に編入した。ところが、平成 16 年 4 月 1 日に国立大学 89 校が一斉に法人化されたのに伴い、国立学校設置法は廃止され、国立大学法人法により、図書館情報大学を卒業、または図書館情報大学大学院情報メディア研究科を修了するのに必要な教育を筑波大学において行うことになった。図書館情報大学在学の学生は筑波大学図書館情報専門学群に、大学院情報メディア研究科在学の学生は筑波大学図書館情報メディア研究科に移籍することになった。心ならずも短期間に学生の身分を翻弄することになってしまったことが悔やまれるが、図書館情報大学は当初の予定より早く平成 16 年 3 月 31 日に閉学となった。橘会からも多大のご支援をいただき、平成 16 年 3 月 29 日に図書館情報大学の閉学式を行い、記念のモニュメントや橘の植樹を行った。

1921 年に開設された文部省図書館員教習所に始まり、1964 年開学の図書館短期大学、1979 年開学の図書館情報大学と続いてきた人材育成と学問発展の流れとを発展させるミッションは、筑波大学図書館情報専門学群、図書館情報メディア研究科が受け継ぐことになった。法人化に伴い、教員定員や予算などにおいて研究科の位置付けが重

くなり、1984 年設置の図書館情報学研究科（修士課程）、2000 年の区分制博士課程情報メディア研究科（前期課程 37 名、後期課程 21 名）への改組と、大学院を充実させてきたことが大きな意味をもつことになった。筑波大学には、現在、人文社会科学研究科、ビジネス科学研究科、数理物質科学研究科、システム情報工学研究科、生命環境科学研究科、人間総合科学研究科、図書館情報メディア研究科と 7 つの博士課程研究科からなっている。法人化後、知的コミュニティ基盤研究センターは図書館情報メディア研究科附属のセンターとして、研究科の研究のフロンティアを担うことになった。教員も、大学院の授業・研究指導の担当の有無にかかわらず、図書館情報メディア研究科に属することになった。

法人化は、学長のリーダーシップの発揮など柔軟な経営体制により大学を活性化するのが目的であるが、予算削減・教職員の削減という財政支出削減を目指す取り組みでもある。研究科の法人化の手始めは、第 3 者評価や競争原理の導入に対してというよりも、直面する予算削減に対して、教育研究推進の提案で対応するという、本来は日常的に行わねばならなかった改革を積極的にめざすことと考えられる。それには、時代や社会の要請に柔軟に応える取り組みが必要なことは言うまでもない。80 年にわたる図書館情報学の歴史を持ち、この分野の先進的な取り組みの実績をあげてきた図書館情報大学と、多様で幅広い学問領域にわたる先端的研究の実績をもつ筑波大学が統合して、新しい学際的研究分野を切り開くことが統合の目的であった。全国の大学に先駆けて統合の道を選んだ吉田学長の方針は、ミッションの展開においても、法人化という大学を取り巻く環境の変化のなかで進むべき方向を先見するものであったように思われる。

## 第 1 回総会記録

1. 日時 平成 16 年 7 月 24 日(土)  
14 時 05 分 ~ 16 時 10 分
2. 場所 日本図書館協会 2 階 研修室  
(東京都中央区新川 1-11-14)
3. 出席者 理事 12 名  
監事 2 名  
会員・特別会員 11 名 出席
4. 配付資料
  - (1) 第 1 回総会次第
  - (2) 平成 15 年度決算書
  - (3) 平成 16 年度予算(案)
  - (4) 第 1 期役員(案)
  - (5) 同窓会統合に伴う図書館情報大学同窓会橘会の茗溪会加入について
5. 次第
  - (1) 開会の辞  
司会の森智彦理事により、本総会が茗溪会と統合後の支部「図書館情報学橘会」としての第 1 回総会となる旨の説明とともに、第 1 回総会の開会の辞が述べられた。
  - (2) 議長選出  
会則により高鷲忠美会長が議長に選任され、開会挨拶が述べられた。
  - (3) 来賓紹介
    - 1) 高鷲忠美会長から来賓として筑波大学図書館情報メディア研究科長の磯谷順一教授および筑波大学附属図書館長の植松貞夫教授が紹介された。
    - 2) 磯谷順一研究科長より、平成 16 年 4 月の国立大学の独立行政法人への移行にともない、図書館情報大学が平成 16 年 3 月末で閉学し、在学生は筑波大学に移籍した旨の報告があり、筑波大学図書館情報学群・情報メディア研究科等の近況について紹介があった。

- (4) 議事録署名者の指名  
高鷲忠美会長より以下の 3 名が議事録署名者として指名され、了承された。  
石川亮、村田輝、岡田英孝
- (5) 議事
  - 1) 図書館情報大学同窓会橘会平成 15 年度事業報告について  
寺沢白雄副会長より、口頭により、以下のよう  
に平成 15 年度事業報告があった。  
茗溪会との統合(詳細は森茜副会長より報告)  
大学行事への参加  
第 5 回総会(7 月)・臨時総会(12 月)の開催  
会報第 6 号の発行  
新体制の同窓会への卒業生の勧誘  
以上の平成 15 年度事業報告について、拍手  
多数により承認された。
  - 2) 茗溪会との統合について  
森茜副会長より、  
昨年 12 月の臨時総会で茗溪会との統合  
方針が決定した  
図書館情報大学の閉学にともない統合  
時期を 4 月 1 日とする方向で茗溪会事務局  
との調整を進めた  
6 月 18 日に高鷲会長名で茗溪会理事長宛  
に添付資料(5)の文書を送った  
6 月 25 日の茗溪会理事会で前項文書の通  
り統合が決定され、支部の名称は「図書  
館情報学橘会」、略称は当面「橘会」と  
することも決まった  
本総会が支部としての第 1 回総会になる  
平成 17 年度より会費の 1 割が支部経費  
として支部の運営にあてられる  
と統合の経緯について報告された。  
高鷲会長より、臨時総会での決定事項から大  
幅な修正はないと補足説明があった。  
以上の報告について、拍手多数により承認さ  
れた。

3) 図書館情報大学同窓会橘会平成 15 年度決算報告について・同監査報告について

寺沢白雄副会長より、配付資料(2)にもとづき決算報告が行われた。

続いて石川亮監事より、監査の結果、適正であった旨、報告があった。

以上の平成 15 年度決算報告について、拍手多数により承認された。

4) 図書館情報学橘会平成 16 年度事業計画案・予算案について

寺沢白雄副会長より、平成 16 年度は大きな事業計画はなく、支部としてどのような活動を行っていくかを検討する時期としたい、と提案があった。

続いて、平成 16 年度予算について、配布資料(3)にもとづき説明があり、統合に関わる配付資料(5)の文書内容にもとづき平成 16 年度は茗溪会会費への支出はない、と差異の説明があった。

高鷲忠美会長より、会費収入の点で予算の見通しが難しく当面は様子をみたい、平成 16 年度は会員の勧誘に重点を置いている、と補足説明があった。

これに対し、統合後の会の運営について、以下の質疑応答および要望があった。

「新しい同窓会への要望として、年配の世代に向けた活動とともに若い世代に向けた活動も行なって欲しい。新しい動きが活発な公立図書館や学校図書館、国会図書館の分野からの役員を加えて、事業計画に反映して欲しい」

積極的な提案を前向きに検討していきたい。

「茗溪会のホームページには、年度会費を 35 回、または入会后 5 年以内に 25 回分を一括納入した者は以後の年度会費を免除、とある。旧橘会の会員の場合にこの起算年度はいつになるのか。また旧橘会の終身会員の位置づけはどうなるのか」

規定の細部についてはまだ詰めていないが、一括納入等の起算は各自が卒業後に旧同窓会に入会した時点になるだろう、との感触を持っている。終身会員についても認められる方向で調

整していき、検討結果はホームページなどでお知らせする。

「茗溪会の年度会費の 1 割の支部経費では現在の支出規模をまかなえない。今後は会費収入と支出とのバランスをどのように図っていくのか」

これまでの会費収入で当面の資金はある。茗溪会支部によっては支部会費を集めているところがある。支部会費がよいのか、寄付金を募るのがよいのか、慎重に検討していきたい。

以上の平成 16 年度事業計画・予算案について、拍手多数により承認された。

5) 新役員について

高鷲忠美会長より、配付資料(4)にもとづき新役員の紹介があり、拍手多数により承認された。

6) 顧問の推戴について

森茜副会長より、故吉田政幸学長とともに本会の活動に多大なご協力をいただいた植松貞夫筑波大学附属図書館長(前図書館情報学群長)を顧問に推戴したい旨提案され、拍手多数により承認された。

植松貞夫顧問より就任挨拶が述べられた。

7) その他

特になし。

(5) 講演

「学校図書館を学校経営の中核にすえる」

(高鷲忠美八州学園大学教授)

(6) 閉会の辞

司会の森智彦理事より、第 1 回総会の閉会の辞が述べられた。

収 入 の 部

項目	予算額( )	決算額( )	差し引き額 -	備考
前年度繰越金	12,582,748	12,582,748		
会費収入	1,200,000	1,714,000	514,000	
正会員		722,000	722,000	2,000 円×361 人
学生会員		930,000	930,000	10,000 円×93 人
特別会員				1,000 円×0 人
		62,000	62,000	H16.3 卒業・修了生
名簿・記念誌頒布		73,500	73,500	名簿、記念誌頒布代
寄付金				
総会懇親会会費		25,000	25,000	1,000×25 人
雑収入	3,000	123	-2,877	預金利息
合計	13,785,748	14,395,371	609,623	

支 出 の 部

項目	予算額( )	決算額( )	差し引き額 -	備考
消耗品費	40,000	8,480	31,520	ラベル、用紙等
通信費	750,000	791,578	-41,578	第 5 回定期総会、臨時総会案内発送
諸謝金	300,000		300,000	
印刷製本費	400,000	530,481	-130,481	会報発行、総会案内状等作成
賃借料	60,000		60,000	
諸経費	250,000	159,546	90,454	理事会開催会場費、総会懇親会費等
大学・同窓生支援金	200,000		200,000	
備品費				
雑費		17,755	-17,755	資料コピー代他
名簿作成費用				
記念誌作成費用				
寄付		1,000,000	-1,000,000	図書館情報大学閉学式寄付
慶弔費	100,000	21,525	78,475	吉田顧問葬儀献花
支出合計	1,900,000	2,529,365	-629,365	
予備費	11,885,748		11,885,748	
合計	13,785,748	2,529,365	11,256,383	

次年度繰越金	11,866,006
上記金額保持状況(平成16年3月31日現在)	
貯金(郵便局普通貯金)	2,603,467
貯金(郵便局定額貯金)	5,501,000
銀行口座	3,406,723
手持資金(現金)	116,946
振替口座(郵便局)	130,220
筑波活動資金(現金)	107,650
合計	11,866,006

平成16年度事業計画

収 入 の 部				
項目	平成16年度 予算額( )	平成15年度 予算額( )	差引増減 -	備考
前年度繰越金	11,866,006	12,532,748	-666,742	
会費収入	410,000	1,200,000	-790,000	3,500円×60人(H15年度納入者の2割) 2,000円×100人(賛助会員)
委託徴収負担金	21,000		21,000	茗溪会会費徴収手数料分 茗溪会会費1人につき350円
雑収入	15,000	3,000	12,000	名簿、記念誌頒布代
合計	12,312,006	13,735,748	-1,423,742	
支 出 の 部				
項目	平成16年度 予算額( )	平成15年度 予算額( )	差引増減 -	備考
消耗品費	40,000	40,000		
通信費	803,200	750,000	53,200	90円×4800人×1回 80円×1500人×3回 振込手数料(会費) 70円×160
広報費	100,000	250,000	-150,000	HPコンテンツ作成費用
諸謝金	50,000	300,000	-250,000	1,000円×2時間×25日
印刷製本費	400,000	400,000		会報等作成
賃借料	60,000	60,000		総会会場借用料
諸経費	150,000	250,000	-100,000	理事会開催会議費
大学支援金	100,000	200,000	-100,000	学生補助、同窓生生活動補助
茗溪会会費	210,000		210,000	茗溪会会費支払い(3,500×60)
慶弔費	100,000	100,000		
支出合計	2,013,200	2,350,000	-336,800	
予備費	10,298,806	11,385,748	-1,086,942	
合計	12,312,006	13,735,748	-1,423,742	

## 岩淵泰郎副会長のご冥福を祈る

### 【岩淵泰郎（いわぶち・やすお）副会長の略歴】

1931年8月15日大阪市生まれ。千葉県立千葉高等学校卒業後、文部省図書館職員養成所1954年3月卒業。1954年4月東京学芸大学附属図書館勤務。整理係長、参考係長、閲覧係長を経て、1979年4月山口大学附属図書館閲覧課長に昇任。1980年4月東洋大学社会学部助教授就任。1987年4月教授昇任。2002年3月31日東洋大学社会学部定年退職。2004年10月18日急逝。

この間、東洋大学短期大学部、東洋大学、聖徳学園短期大学、専修大学、大東文化大学、法政大学、東京学芸大学、学習院女子短期大学で非常勤講師を務める。

日本図書館協会で、分類委員会委員、目録委員会委員を務める。

図書館整理技術研究会（現：図書館資料組織化研究会）を1960年4月設立、代表を務める。機関誌『テクニカルサービス』（現『資料組織化研究』）。多くの若手の図書館員に発表の場を提供、育成に手を貸す。

1953年より、日本山岳会会員。

図書館現場でも後輩の面倒見がとてよく、教育に携わっても学生の教育に努力を傾注した。目録、分類の教育では、大変厳しいハードルを学生にかし、それを乗り越えることを要求し、現場で仕事にたったときの心構えを教えることとした。

同窓会橋会では、古くから関わり、長い間同窓会名簿の作成の中心として活動されてきた。また、事務局長役を長い間務められ、最後までその役目を全うされたことに心から感謝の意を捧げたい。

### 岩淵副会長の逝去を悼んで

茗溪会支部図書館情報学橋会会長  
高鷲 忠美

岩淵さんと出会ったのは、私が東京学芸大学の卒業間際のことであり、そのとき岩淵さんは東京学芸大学の附属図書館整理係長になられてばかりであった。1963年初頭のことであり、岩淵さんは31歳であった。私は東京学芸大学卒業後、文部省図書館職員養成所に行くことになり、岩淵さんにいろいろご相談に乗っていただいた。入学後も、分類を加藤宗厚先生、目録を服部金太郎先生に習ったが、アルバイトで実際に分類・目録作業をする中でわからないことを岩淵さんに電話してお聞きし、ずいぶんご迷惑をかけた。夏休みには、学芸大学図書館で整理のアルバイトをし、岩淵さんに一日100冊目録をとるのがノルマだと言われ、参った。その折りのカードはOPACに代わり、そのうちに一枚もなくなるだろうが。

その後、亜細亜大学図書館に入ってからもおそわることばかりであったが、1960年に岩淵さんが設立された「図書館整理技術研究会」に強引に入らせていただき、

目録などの研究を開始し、翻訳などからはじめた。こうしたことから、私の場合は研究者の道にはいることになったと思う。

東洋大学の司書講習（夏と夜間）には、岩淵さんは目録担当で行かれていたので、演習の時間に私もお手伝いをし、問題作成や受講生の相談にのっていた。

この時代に岩淵さんは日本図書館協会の目録委員会、分類委員会にも委員として参加されており、『日本目録規則1965年版』では中心メンバーの一人として活躍されていた。1969年には、『和漢書目録のつくり方』（日本図書館協会）を刊行されたが、丸山昭二郎氏の『洋書目録のつくり方』（日本図書館協会）と並んで、実務も最高の指針となった。1971年には、『日本目録規則1965年版実例集』が出た。

『日本十進分類法』には、第7版から第9版まで委員として関わっている。分類、目録といった資料組織法の世界では、『資料組織化便覧』（日本図書館協会、1975）、『資料組織論』（単著：成文堂、1975）、『資料組織概説』（東京書籍、1998）、『資料組織演習』（東京書籍、1998）などを出されている。

また、東京学芸大学から山口大学付属図書館閲覧課長を経て、1980年4月東洋大学社会学部助教授(1987年教授)となられ、教育の場に移られた。岩淵先生は、大変教育者としては学生、卒業生の面倒見が良く、とても慕われていた。

本同窓会では、ごく初期の頃から関わられており、長い間同窓会名簿を実質的に一人で編集されるなど、同窓会の存続に大変大きく力を貸していただき、橋会が図書館情報大学同窓会と統合する際にも、実によく井上会長を助けてその実現に力を発揮して下さった。筑波大学同窓会茗溪会の一支部となり、新しくスタートを切る丁度そのときに、岩淵副会長を失ったことは本同窓会にとっても大変大きな損失である。より一層同窓会を意味のあるものにし、岩淵さんのこれまでの貢献に報いるのが残された我々の使命であると考えます。

どうか岩淵さん、安らかにお休みください。

## 岩淵先生との思い出

井上哲也

岩淵先生は1954年に養成所を卒業、私の3期後になります。従って在学中の先生には接したことはありません。偶然先生の同期の藤岡君を迎え入れたので、彼から多士済済のクラスでの先生の姿を理解できるようになりましたし、そして友人を介しての交際もはじまりました。先生は東京学芸大学に奉職されてから図書館技術面の研鑽に励まれ、その果実を部下に注がれ、秀れた後継者を多く育てられました。温厚篤実なご指導の評判は高く、先生の信奉者が生まれました。又同志と図書館整理技術研究会(図書館資料組織化研究会と改称)を立ち上げ、代表となられました。私も興味あるテーマのときは仲間に入れていただき高説を拝聴できました。先生は研究成果を自腹を切っても印刷物にまとめ広く配布されましたので、整理技術に関しては、東京地区では先生を知らぬ人はいなかったでしょう。後日縁あって私が学芸大に転任した折には、先生から懇切丁寧に指導を受けた顔見知りの職員が在職しており、専門端が多かった私には頼りがいのある助人でした。

1979年に山口大の閲覧課長に栄転されましたが、わずか1年足らずで、東洋大学社会学部教授に招請され

て転出されました。当時私どもは啞然としました。なぜなら、国立大の課長になるのは出世コースに乗った風潮でしたから。しかし、最も驚いたのは文部省の人事課でしたでしょう。先生が教職を選ばれたのは、20年に及ぶ現場の経験から、図書館員の再教育の必要性和職員のレベルの向上を切実に感じられたからだと思えます。

多忙な教職の一方で、先生は長年にわたってJLAの目録、分類委員会のメンバーとして、整理技術の基本ルール作りに貢献されました。

東洋大学では和田先生が創設された図書館学講座を引継がれ、時代の要請に見合ったカリキュラムの改訂や講師陣の組織に努力され、東洋大学図書館学専攻学科の名声を高められました。しかしIT化の波は、数回に及ぶカリキュラム改正でも抗し難く、社会学部再編に合わせて、図書館学専攻科目は学部第2部に移されました。この時の先生の苦悩と無念さは察するに余りあります。

先生は又同窓会の再興にも盡力されました。同窓会運営の基本ルールは卒業生名簿の刊行にある。との信念の下で、同志とはかり、苦勞の末1982年に念願の同窓会名簿を完成されました。過日図書館情報大学20周年創基80周年を記念して刊行された「名簿1922~2001」は、この時からの蓄積データと編集技術のノウハウが基礎となっています。編集者は当然のことながら岩淵先生他でした。

晩年の先生からは、先生がスポーツマンであったことは窺えませんが、先生は高校生の頃から山登りが趣味でした。過日吉田元学長を囲んでの懇談の折に、話題が山登りに及ぶと、岩淵先生が日本山岳会のバッヂをやにわにはずし、「これは日本山岳会の会員章ですが、一般会員のそれとは違います」と誇らしげに披露されました。なるほど先生は山岳書誌を編集されておられるし、われわれの知らぬところで山岳会に貢献されているのでしょう。それ故昨今の登山ブームでの会員とは異なることを強調されたかたのではないかと思います。あるとき西丹沢の沢登りの醍醐味を話され、私にも体験するよう勧められました。そして、ラジューズや固形燃料などのキャンピング用具を送ってこられました。私は臆病だし技術もマスターしていませんので体よく敬遠しました。近年私が地域の仲間と低山を歩き廻っていることを知られ、早速「東京付近の山」をいただきました



た。私はすでに後発の類書「東京周辺の山 350」を重宝しているのですが、今は先生の「形見」となっていましたから、これから登山計画を企てる時先生のご好意を無にしないように、参考することにします。

拙稿に登場した、吉田先生、藤岡君、岩淵先生の3人は、なんの因縁か、全員が彼岸に行かれました。ご冥福をお祈りします。 合掌

## 岩淵泰郎さんの逝去を悼む

石山 洋

橘会副会長岩淵泰郎さんが、本会のために尽くされたのは関野真吉先生が会長をしておられた頃(1961～69)からでしょう。それからざっと半世紀、彼は本会のためにさまざまな苦勞を惜しまなかった人でした。1976年鳥居美和子さんが国立教育研究所を退職されてから、一時東大教育学部図書室に事務局があった時期を経て、岩淵さんが東洋大学へ赴任されて1983年、同窓会(当時、会長 鈴木英二さん)の事務局長を引き受けられ、以来図書館情報大学同窓会との合併なるまで担当されました。パソコンによる名簿管理なども日外アソシエーツの大高利夫さんらの協力を得て、彼によって確立されたのです。私は鈴木さんの後、会長を引き受けましたので、その『会員名簿 1988年版』の刊行に立ち会いました。さらに1989年橘会は『芸艸会雑誌・図書館研究』復刻版(7冊)を刊行しましたが、同『別冊解題・総目次』末尾にある岩淵さんの「編集後記」を読むと、彼がその準備に長い間努力したことが解ります。この復刻事業で作った基金がのちに役立つことにもなりました。

日本図書館協会の分類委員会や目録委員会、日本図書館学会(現、日本図書館情報学会)でも、彼と一緒に私も委員や役員をしておりました関係もあって、彼には何かと世話になりました。目録委員会関連では、彼は1971年『日本目録規則一九六五年版実例集』を編集していますが、私も若干お手伝いしています。分類委員会では、NDC第9版は私が主宰したので、彼は社会科学関係などを分担されました。日本図書館学会では、1987年～1992年度総務担当常任理事(事務局長)を務められ、会議や庶務万般まで世話されています。

岩淵さんは山男で、図書館職員養成所在学中の1953年から日本山岳会会員でした。(彼は1993年日本

山岳会機関誌『山岳(第1～85年：1906～1990)総索引』を編集した。)至って頑健、酒を飲むほうでもなく、品行方正、平均寿命にも未だ時間がありましたのに、忽然として幽冥境を連れ、彼岸へ去ってしまったのは現在なお信じがたく、真に残念と申すほかはございません。

今はただ故人の遺徳を偲び、ご冥福をお祈り申し上げるとともに、彼が身も心も捧げた遺業を損なうことの無いように務めて参りたいものと存じます。

合掌。

## 岩淵先生ありがとうございました

小松幸子

先生にお会いしたのは、昭和61年(1986)8月に青山学院大学で開催されたIFLA東京大会で、当時の橘会副会長故鳥居美和子氏(元国立教育研究所図書館事務長平成3年没)のご紹介でした。かれこれ20年近く種々ご指導を受けたことになります。

橘会が陳情書「国立図書館大學設立要望」を秋岡悟郎名で昭和28年に提出以来、国会議員に働きかけ超党派の図書館議員連盟を立ち上げ、関係団体の協力を取付けるなどと長期間に渉る粘り強い運動を展開して、ようやく昭和55年に図書館情報大学が創設されたと実務を担った当人の鳥居副会長から何度も聞かされたものでした。

20年以上もの長い大學設立活動が、一段落して橘会はエネルギー消耗が激しく、その上、情熱をかけて待ち望んだ大學からは、時代が要請しているジョウホウに特化したいとの理由で、“橘会”は、図書館学そのものを中心に行っている同窓会であるので橘会とは距離をおきたいとの連絡がきたのでした。

しかし、橘会としては、入学した学生にとっては、就職など同窓会として役立つことはあるうにと何度か大學に申し入れをしたけれども、大学には、大學の意向で別組織の同窓会が並存していたのでした。事実、故小野泰博先生他数人の先生と我孫子駅前の同窓生故那須玉江氏レストランでの会に岩淵先生と同席したのは昭和61年頃であったように記憶しています。平成元年図書館情報大學10周年記念式典にも橘会役員として岩淵先生もご出席されておられます。

その後なお10年を経て、ようやく、図書館短大卒業生までを会員とする“橘会”と図書館情報大学の卒業生を会員とする“図書館情報大学同窓会”とが合併できたのは、大學設立20周年の時期、平成11年でした。

つまり、岩淵先生は、橘会副会長兼事務局長として、昭和60年から現在までその大部分の期間重苦しい苦難の時期を、石山洋、丸山昭二郎、井上哲也前会長及び高鷲忠美現会長と共に、途切れることなく、多忙を極める東洋大学図書館学教員の傍ら物心両面で同窓会を懸命に支えられました。前任者鈴木英二、鳥居美和子、松岡要、村口敏子役員の実績を踏まえ毎年の総会並びに名簿刊行3回(1988, 1994, 1999年)を一手に引受け気落ちした同窓生を励まし続けたご功績に敬服するばかりです。亡くなってからお聞きましたが、ここ3年は週2回の透析とのことでした。

同窓会橘会が現在あるのは、故岩淵泰郎副会長の献身的な活動の礎の基に築かれているといっても過言ではないと思っています。

合併にあったても、井上哲也前会長と共に図書館情報学を学び新たな時代を生きる後輩の発展へ繋がるようにと未来志向で対応されさぞやお骨折りのことだったと拝察致します。集大成の「同窓会橘会八十年記念誌」を編集委員長として刊行されました。

いかに時代が進化しようとも、記録・情報知識の流通が文化・文明の継承発展には必要不可欠です。これまで蓄積された図書館情報学は新たなステージで必ずやさらに飛躍発展していくであろうと岩淵先生は懸命にエールを送り続けて下さいました。

岩淵先生本当にありがとうございました。  
心からご冥福をお祈りします。

## 原田勝先生ご逝去

原田 勝(はらだ・まさる)先生略歴

筑波大学図書館情報学系教授 専門は図書館情報学(科学技術政策・科学社会学)。昭和19年(1944)11月18日、中国・北京生れ。東京大学工学部卒(昭和44年)、東京大学大学院工学系研究科修士課程修了(昭和46年)。昭和46年東京大学助手、51年ユネスコ(パリ本部)勤務、56年京都大学助教授を経て、平成5年図

書館情報大学(現・筑波大学図書館情報学系)教授。著書に「図書館/情報ネットワーク論」、共著に「電子図書館とマルチメディア・ネットワーク」、共編著に「電子図書館」などがある。平成16年(2004)6月30日逝去(59歳、くも膜下出血)。

受賞：テレコム社会科学賞奨励賞論文(第6回)「図書館/情報ネットワーク論」(平成3年)、日本図書館学会賞「図書館/情報ネットワーク論」(平成3年)

所属学会：日本図書館情報学会・日本科学史学会・情報科学技術協会

## 原田勝先生との出会い

筑波大学・大学院図書館情報メディア研究科  
石川徹也

原田先生との出会いは、お互いの最初の研究論文に基づき、これからの研究の方向を熱く語りあったことに始まる。その論文とは、原田先生が東京大学・教育学部助手に赴任され発表された「ビブリオメトリクスの方法とその応用」(Library and Information Science, No.12, pp.109-141, 1974)であり、また、私が図書館短期大学・文献情報学科の助手に採用されてから、自動索引の研究に着手し、その結果を「索引語の定量分析実験」(図書館短期大学紀要、No.7, pp.31-41, 1974)として発表した論文である。もはや30年前になる。その時、同年輩であることを知り、これから先、図書館情報学を学として理論化する仕事を、互いに協力し進めよう、と一献酌み交わした。

\*

その後、原田先生は1976年7月にユネスコ科学技術情報部に文部省から派遣されることになり、同年の4月頃から「行って何をなすべきか?」と問い掛けがあり、出発前までに2, 3回、同じく一杯酌み交わしながら“日本の、さらにアジア地域においてはまだまだデータベースによる情報流通は遅れているので”といったことを語りあった。

\*

帰国され、1981年から京都大学・教育学部の助教授として赴任され、私が学会等で京都に行く度に、一献傾けていた(とは言うものの、飲む量が違うの

で、実際にはほとんどご馳走になっていた。この中、京阪奈研究学園都市が発足し、関西文化学術研究都市推進機構からの「電子図書館プロジェクト」を京都大学で推進するに当たり、プロジェクト推進の一員として声をかけていただき、「Ariadne」の研究開発を一緒に進めさせていただいた（「Ariadne」は、確か原田先生が提案した名称である）。

\*

以上の様に、その時々において、原田先生とは何かと関わってきた。しかし、熱く語り合った学の進め方について、一献傾ける中、お互い違う道を辿り出していることに気づいたのも事実である。原田先生が（確か）2冊目の著書である「未来の図書館」を上梓された後、「石川も本を出せ！」と言われ、「いや、本を出す暇があったら論文を書け！」と教えられてきたので、今、研究結果をまとめたところである」と見栄を切ったことを思い出す。原田先生の思いは、“「未来の図書館」の受賞にて、図書館情報学の成果が、他者に認められたのだから、石川も成果を示せ！”とのことで、私は私で“図書館情報学の世界で行ってきた研究成果が、他者に認められたので・・・”といった思いにて、方式こそ違い、思いは同じであったことを確信した次第である。

\*

逝くのが早すぎたと思う。定年までに、時に私のおごりにて一献傾ける機会を何度か作りたかったのに、痛恨の極みである。しかし、致し方ない。冥福を祈る。

## 原田勝さんの思い出

金子豊

追悼文の依頼をうけて早速インターネットで原田さんについて検索してみた。その中に旅先でのおだやかな顔立ちの写真があった。

12月22日、東大キャンパスを訪れ、原田さんの卒業論文をみると、テーマは「パルスレーザーのコヒーレンス」（共著でA4, 44頁）である。原田さんが工学部に在学中、私はすでに物理工学・計数工学科図書室に勤めていて、時期的に3年近く重なることになるが、図書室を通して利用者であった学生の方原田さんと、そこで働く

職員としての私との間には、特別のつながりはなかったといえる。

原田さんはさらに大学院に進学して1971年3月、理工学専門課程で「ヘリウム・カドミウムレーザーの研究」（A4, 113頁）によって修士を取得している。院生となった原田さんの姿はみても個人的な接触のないままに、私は1970年2月に附属図書館へ異動となる。ただその当時親しくしていた水野晴元助手（原田さんの卒論で謝辞の中に出ている）を通してのエピソードがある。彼が1969年暮れのボーナスをもらって部屋に入るやいなや、待ち伏せていた院生たちにはがいじめにされ、背広のポケットにあったボーナス袋から1万円札を1枚ぬきとられ、忘年会の費用として使われたということ、後日聞かされたことである。原田さんがその中にいたことはいうまでもない。

1971年に教育学部助手になったことを知った後も、特に話したという記憶もないままにこうして綴っていると、突然1976年のユネスコ行きに飛躍するのである。どういふことでそうなったのか思い出せないままに記すと、季節もいつであったか原田さんの送別会を当時の教育学部図書掛長の山井康司さんと私の3人で行い、赤門前の鳥料理の店で昼食を囲んだのである。

あの日原田さんと別れて以来、再びその姿を見るのがインターネットでのスナップ写真であるとは……

## 大学史発行のご案内

『図書館情報大学史 - 25年の記録』

<刊行の趣旨>

図書館情報大学は平成15年7月16日公布の国立大学法人法に基づき平成16年3月31日をもって閉学した。図書館情報学の研究・教育は平成14年10月1日に発足した筑波大学図書館情報学群・図書館情報メディア研究科として継続しているが、図書館情報大学の閉学を機に、図書館情報大学の歴史をまとめ、刊行することにした。

図書館情報大学は昭和54年10月1日に創設されてから足かけ25年で閉学となったが、時代はまさに情報化の時代であり、急激に変化する情報環境のな

かで図書館情報学の学問領域の確立に向けて全活動を集中してきた。図書館学と情報学の融合を最大の課題として出発し、情報化時代に歩調をあわせこの25年間に「人間の知的創造活動の基盤となるソフトウェア全体」の学にまで成長してきた。図書館情報大学の歴史はまさにこうした新たな学問領域としての図書館情報学確立に向けての歴史である。

『図書館情報大学史』は、従って図書館情報大学が25年間にどのような活動を行ってきたかの全記録であるべきであり、出来る限りデータをもとに活動の記録を示すことを目的としている。図書館情報学の今後の発展のため、基礎的なデータを出来る限り残し、今後の研究等に資する資料を残すことが本企画の趣旨である。

<追記>

とはいえ、組織変遷は資料の散逸を招かざるを得ず、また25年の歳月は決して短くはない。膨大なデータを網羅的に提示することは事実上不可能であり、割愛したデータもまた少なくない。さらに、図書館情報大学の25年の活動に対して、直ちに歴史的な評価を下す段階でもない。その評価は後世に俟たねばならないであろう。従って、限界もあり、完璧は期しがたいが、上記の目的に添い編集を行っている。

なお、本書の性格であるが、上記の趣旨のもとに編集しているので、回想録などの項目はなく歴史的な回顧としての面白さや読み物としての面白さには欠ける嫌いがあり、固い「大学の歴史もの」であることを申し添えておく。

企画から1年、ようやくこの3月末日に刊行できる運びとなった。目次構成は以下の通りである。

目次

刊行の辞

第1章 沿革と歴史

第1節 沿革

第2節 歴史

第2章 管理運営・組織・予算・施設

第1節 管理運営組織

第2節 職員

第3節 予算・施設の整備

第3章 教育

第1節 学部の教育課程

第2節 大学院の教育課程

第3節 専攻科の教育課程

第4章 研究活動

第1節 研究活動

第2節 「知の銀河系」の刊行

第5章 教育・研究センター

第1節 総合情報処理センター

第2節 外国語教育センター

第3節 保健・体育センター

第4節 生涯学習教育研究センター

第6章 附属図書館

第1節 附属図書館の歴史

第2節 図書館システム開発センター

第3節 デジタル図書館システム

第7章 学生生活

第1節 入学・卒業・修了

第2節 卒業研究及び学位論文

第3節 学生生活

第4節 就職

第8章 社会的活動

第1節 生涯学習事業

第2節 講演会等

第9章 国際交流

第10章 自己評価

付表 規則・資料一覧

編集後記

『図書館情報大学史-25年の記録』をご希望の方は、郵便振替口座（00190-3-260600）に送料をお振込みください。刊行され次第、お送りさせていただきます。なお、部数に限りがあるため、先着400名とさせていただきます。

加入者名 橘会図書館情報大学史刊行支援会

口座番号 00190-3-260600

金額 500円

申込み締切日 平成17年3月10日

多数のお申込みがあった場合は、先着400名とさせていただきます。

お振込みいただいた料金はご返金いたしません。